

町史編さん室だより



令和9年度の安平町史発刊にあたり、町史編さん作業の進捗状況などをお知らせします。

問合せ 総務課町史編さん室 ☎ 2511

令和9年度の町史発刊にあたり、私たちの先人たちが築いてきた歩みを振り返り、町民の皆様へ理解と愛着を持ってもらうため、今月号から広報紙を通じて、これまでの町の歴史を紹介します。

第一回 安平村が開村するまで

開村までの経緯

開村前の行政事情

明治二年七月、北海道に開拓使が設置され、同年八月には蝦夷地を北海道と改称するとともに、全道を十一国八十六郡に区画し、初めて北海道の行政区画が定められた。なお、開拓使が置かれる以前はこの地域を東蝦夷地と称するのみで、国郡や町村の区画もなかった。

それから四年後の明治六年十二月には各郡管下町村を定め、安平川および合流点以南の安平川を境界として、左岸（南東部）は勇払村に、右岸（北西部）は植苗村に属することとなった。

明治十二年七月、郡区町村編成法が施行され、町村に戸長が置かれることとなり、この地域に勇払外五郡郡役所が苦小牧村に設置され、翌十三年三月には勇払郡各村戸長役場を苦小牧村に設け、勇払村と植苗村もその管轄下に置かれた。

その後、明治二十八年に鷗川外七か村が苦小牧戸長役場管下から分村独立して戸長役場を設置し、同三十年には厚真村が分村し戸長役場を設置した。しかし、早来・追分両地区の戸口数は苦小牧村を上回るほどになっていながら苦小牧戸長役場の管轄下に置かれていた。

鉄道の開通と開基

明治二十二年に創立した北海道炭礦鉄道株式会社は、空知・夕張の炭田を大々的に開発するため、新たに室蘭を石炭移出港に選定して、室蘭・岩見沢・空知太（現・砂川市）間の鉄道と、この路線から分岐して夕張・空知の両炭鉱に達する支線の鉄道敷設許可を得た。

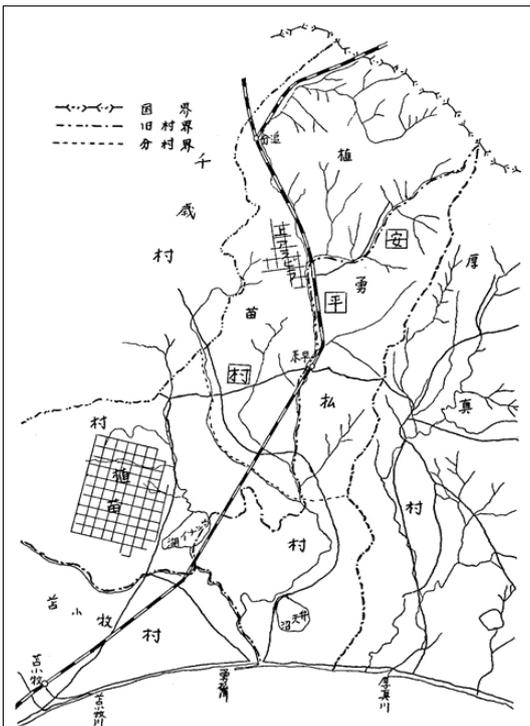
これより先に鉄道建設の話聞いていた植苗村美々（現・苦小牧市美沢）の佐々木駒吉・ヤエ夫妻は、鉄道沿線付近で農耕などに適したフモンケの地を適地と考え、同年秋、フモンケ地区に安平村の開基となる最初の鍬が下ろされた。



翌二十三年に着工した室蘭線鉄道建設工事が進み、二十五年八月、室蘭線鉄道の開通とともに追分停車場が開業。また、二年後の二十七年八月には早来停車場も開業し、鉄道や輸送関係者はもとより、鉄道運輸の便を得て密林の伐採木は林産資源となり、その関係者や農業開拓を行う移住者の入地が増えることとなった。運輸・交通の要衝として産業集積が進み、追分・早来両駅前市街地が形成された。

安平村の開村

室蘭線鉄道の開通による早来・追分両地区への入地者の増加と産業の発展に伴い、戸長役場から数十キロメートルの距離があるという行政上の支障や住民の不便により、地域住民の間にも分村独立による地元への戸長役場設置の要望は切実なものがあった。当局においてもその必要性を認め、明治三十三年六月一日、早来を中心とする勇払村の一部と追分を中心とする植苗村の一部を割き、これらを合わせて安平村が開村し、早来に戸長役場が置かれた。また、これと同時に、北海道庁所属の小林久太が戸長事務取扱を命ぜられ、翌年四月一日に室蘭支庁第一課長の荒川定造が初代戸長に任命された。



▲勇払村・植苗村と分村区域図
(明治33年分村のころ)